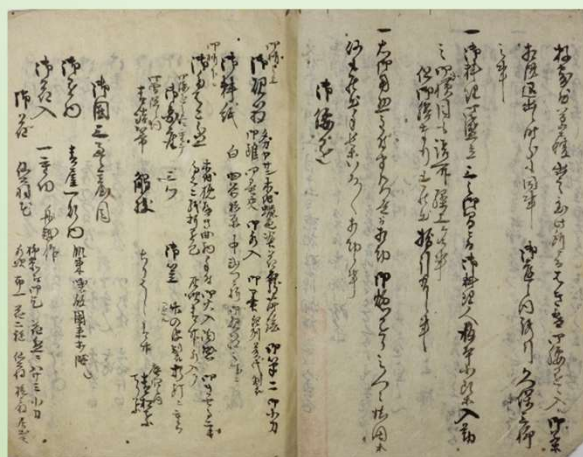
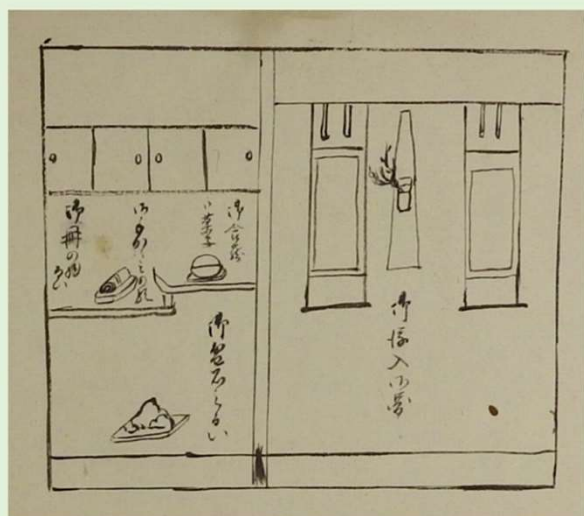


令和5年度夏季展

加賀藩主と

茶会



「御茶湯記録」(16.98-3)

「金谷御殿御茶の節飾付等明細記」(K7-375)

令和5年7月18日(火)

~9月18日(月・祝)

金沢市立玉川図書館 近世史料館

【はじめに】

近世において、茶の湯は武家の嗜みとして浸透していました。加賀前田家の当主においても、初代利家と2代利長は千利休をはじめとした当時の高名な茶人と交流を持ち、3代利常・4代光高も茶の湯に大きな関心を示すなど、茶の湯に親しんだ人物が複数おり、茶会を催すこともありました。本展示では、加賀藩主と茶の湯・茶会や、茶会の舞台となった茶室に関わる当館所蔵史料を紹介します。

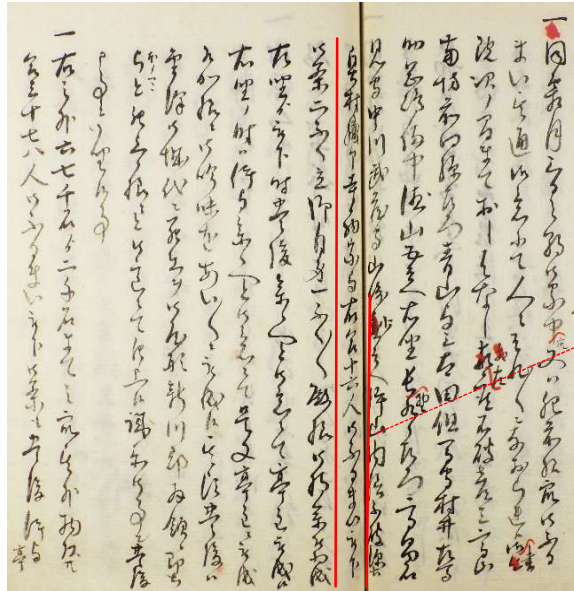
【茶会】

茶会を行う契機としては、個人の嗜みのほか、来客時の社交・饗応の場や追善法要など、さまざまなものがありました。まずは、茶会のことが書かれている史料を紹介します。

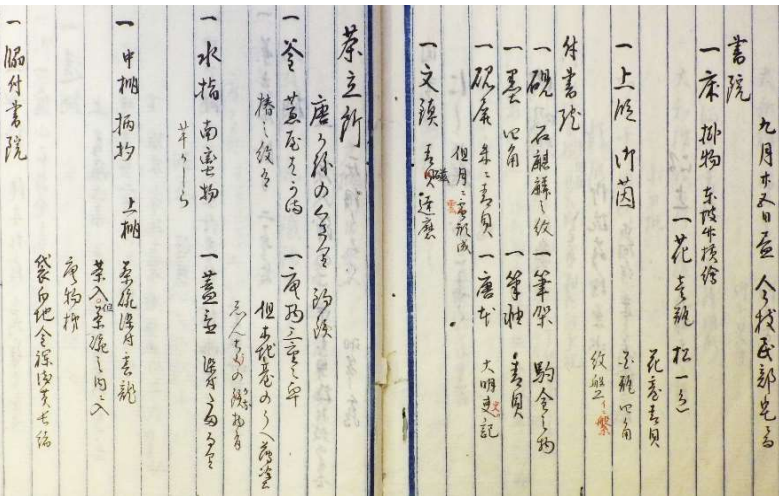
<藩士との茶会>

「国祖遺言」(16.12-51)

文禄3年(1594)11月に利家は家臣に対して茶を振る舞いました。朝に不破彦三ら重臣16人、その他、2000石~6、7000石の衆や物頭など計37、8人にも茶を振る舞いました。



右合十六人御ふるまい被下
御茶二ふく立御自身一ふく一
殿様御持参被為成



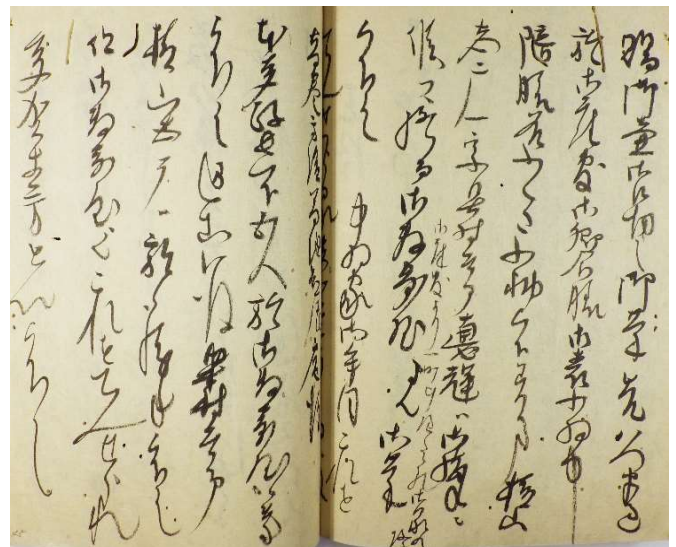
「綱利公へ献御茶道具付并献立」

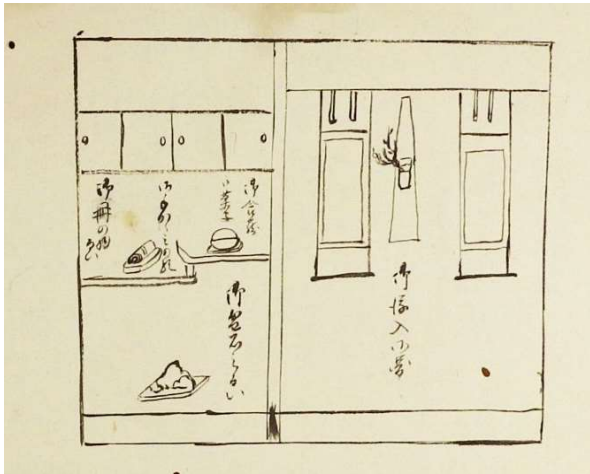
(16.14-8)

5代綱利(綱紀)は金沢に初入国した寛文元年(1661)に、重臣数名の屋敷を相次いで訪問しました。9月1日に本多政長、9月4日に横山忠次、9月8日に前田孝貞、9月11日に奥村栄清(時成)、9月15日に奥村庸礼、9月25日には今枝近義宅をそれぞれ訪ね、茶や能などの饗応を受けました。

「葛巻昌興日記」(16.40-75②)

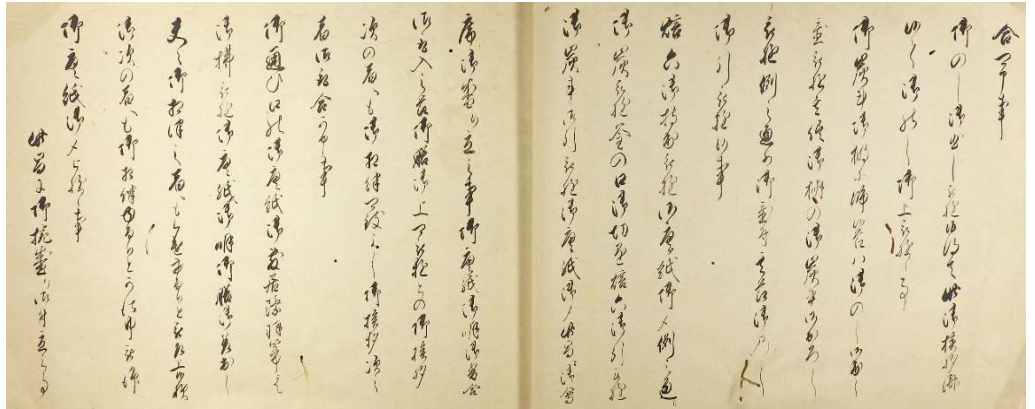
延宝6年(1678)12月に綱紀は蓮池御庭(現兼六園)に重臣本多政長、横山忠次、奥村庸礼、奥村栄尚(時成)を招いて饗応しました。これは完成間もない蓮池庭を披露するために開かれたものと考えられています。このとき、数寄屋において綱紀自ら茶を点てました。





「御茶湯記録」(16.98-3)

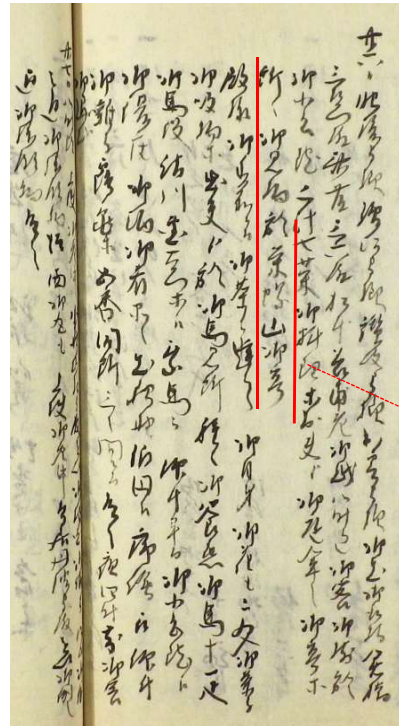
天保4年(1833)11月に江戸藩邸の「御広間」で13代齐泰のために催された茶会の記録です。この茶会は、十二畳半の広間で行われ、床の中央に花入、その左右に二幅の絵が掛けられました。床脇にある違棚の上段に菓子に入った食籠、下段に手鑑、地板に盆石が飾られました。



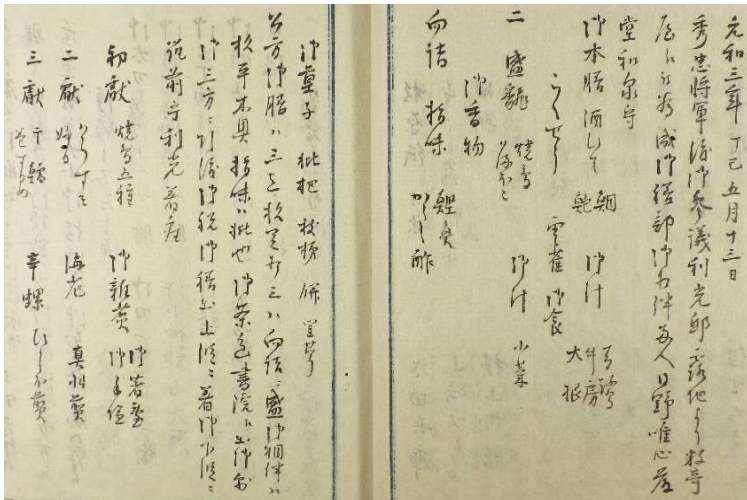
<将軍家・他大名家との茶会>

「政隣記」(16.28-11⑫)

11代治脩の代の天明2年(1783)3月に会津藩松平容頌・容詮父子が本郷邸を訪問しました。御殿内での膳の後に、御庭の見物に移りました。傘御亭や御馬見所などを巡り、「栄螺山御亭」(高山御亭)では治脩が茶を点てました。齐泰の代の弘化4年(1851)5月にも会津藩松平容敬・容保父子が本郷邸を訪問していますが、その際にも高山御亭で茶が点てられています。



於栄螺山御亭
殿様御手前二而御茶被進之

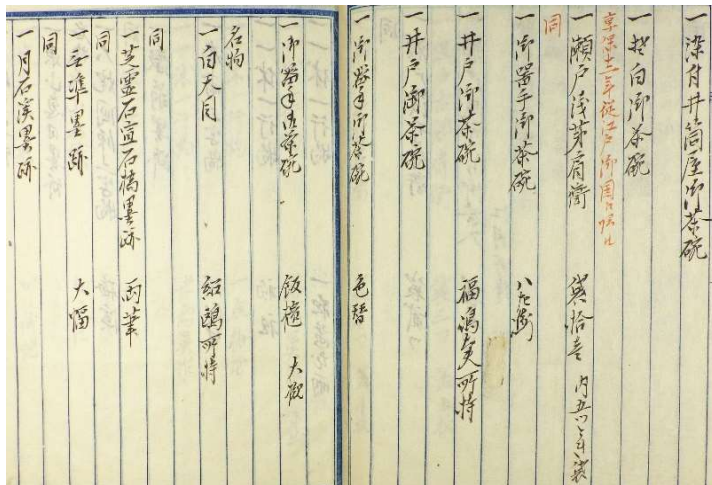


「太閤并将军御成記」(16.13-25)

将軍が臣下の屋敷を訪問することを御成(おなり)といいます。元和3年(1617)徳川秀忠の辰口邸御成の際には、まず露地から数寄屋に入り、数寄屋での茶事が終わった後に御書院での式三献、次いで御広間での献上・下賜、観能と進みました。御成に茶事を取り入れたものは「数寄の御成」と呼ばれ、数寄屋から入る形式の御成は「数寄屋御成」と呼ばれています。

【茶道具】

茶会の開催に際しては、茶入・茶碗・茶杓・水指・釜・花器・香炉・屏風・掛物・墨跡等さまざまな道具が使われました。それらは、点前の際や、室内に飾るときなどに用いられました。茶道具は茶会を演出する重要な要素のひとつであり、客人をもてなすべく意匠に凝った道具が使われました。茶会記には茶事や茶会の際に用いられた諸道具が記されています。

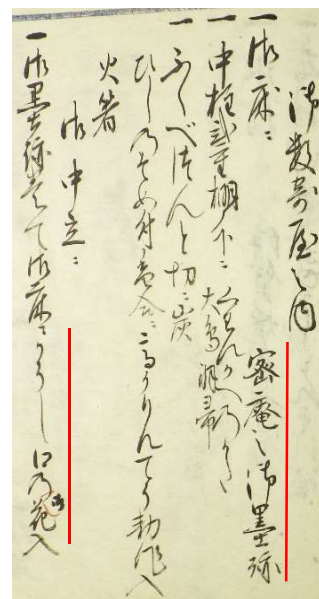


「前田家名物御道具記」(16.98-5)

享保10年(1725)の名物道具の一覧の写しです。前田家は、富士茄子をはじめとした多くの名物道具を保有していました。茶道具では、多くの茶入、茶碗が書かれているほか、水指・香合・茶杓や掛物なども記されています。

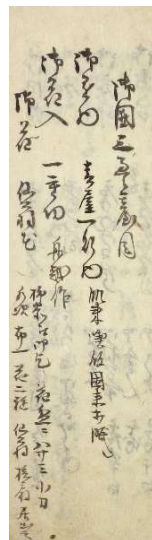
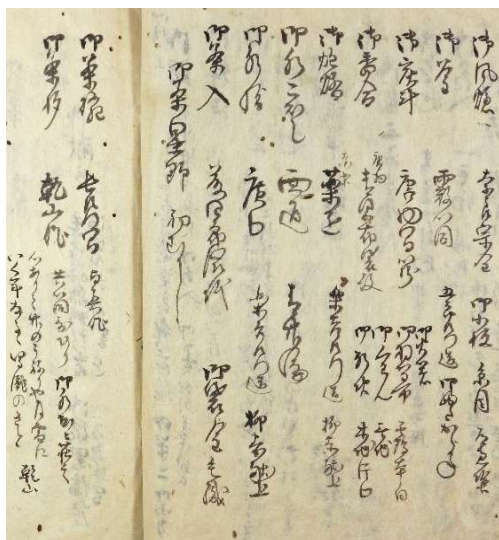
「御成次第」(16.13-31)

御成に際しては、保有する名器を用いて將軍をもてなしました。寛永6年(1629)の御成の茶事の際には、数寄屋の床の間に南宋の僧密庵咸傑の墨跡が飾られ、中立の際に墨跡に代わって「かうし口(柑子口)の御花入」が置かれました。



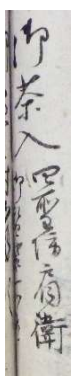
かうし口乃御花入

密庵の御墨跡

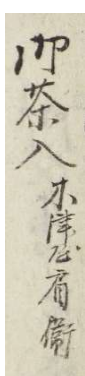


「金谷御殿御茶の節飾付等明細記」(K7-375)

文化5年(1808)に治脩の治療のために京都から呼び寄せた医師畑柳泰を招いて催した茶事の手配や飾付、諸道具、献立の記録です。このときは藩の御茶堂である市井友説(英仙)が差配をしました。市井家は、「先祖由緒并一類附帳」によると、歴代の多くが御茶堂を勤めた家でした。



四聖坊肩衝



木津屋肩衝

茶道具は贈答品としても価値を持ち、近世ではとりわけ初期においては多くの茶入が贈答品として用いられました。將軍徳川綱吉の本郷邸御成の際にも多くの贈答がなされましたが、茶入では、前田家からは「木津屋肩衝」を献上しており、綱吉からは「四聖坊肩衝」(師匠坊肩衝)が下賜されました。

「御成一巻」(部分)(16.13-38)

【茶室】

茶事や茶会を行う場として茶室があります。茶室には、床や棚、水屋などを備えた空間が設けられ、個人の嗜みの他、茶会をはじめとした饗応や社交の場として用いられました。茶室には露地と呼ばれる庭が附属していました。作り手は、客人をもてなすため茶室や露地にも工夫を凝らしていました。今回の展示では、江戸藩邸、金谷出丸、兼六園の茶室関係史料を取り上げます。

<江戸藩邸(本郷・駒込)>

江戸藩邸とは、江戸に置かれた諸大名の屋敷のことです。

前田家の江戸藩邸は数度の変遷を経て、天和3年(1683)に上屋敷である本郷邸、中屋敷である駒込邸、下屋敷である平尾邸に定着しました。当初は下屋敷であった本郷邸の庭園には「寛永の御成」の作事に関する記録に露地や御亭の記述があるなど、御亭が存在したという記録が残されています。来客時に客を庭園や御亭に招き入れることがありましたが、饗応の一環として御亭で茶事が催されることもありました。また御亭に限らず、本宅にも茶室が存在した時期があったことも絵図上で確認できます。このほか、本郷邸内には、嘉永年間頃に三華亭という茶室が齊泰によって建てられました。この茶室は数度の移築を経て、昭和24年(1949)に成巽閣の敷地に移され、今に至っています。



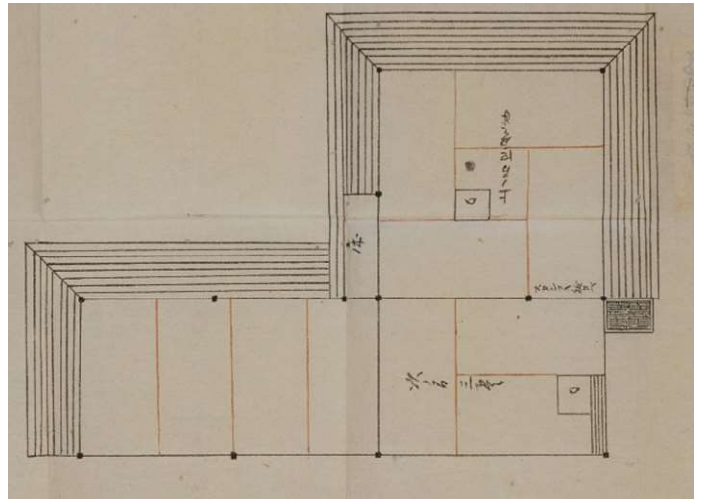
高山御亭

傘御亭

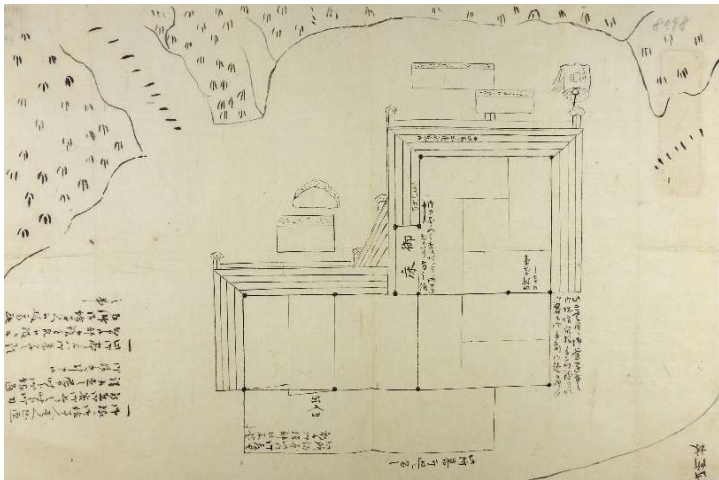
新御亭

「江戸御上屋敷絵図」(部分)(18.6-27①)

本郷邸の庭園は綱紀によって育徳園と命名されました。育徳園には、19世紀半ば頃には、傘(からかさ)御亭、高山御亭、新御亭の3つの御亭があったことが知られています。

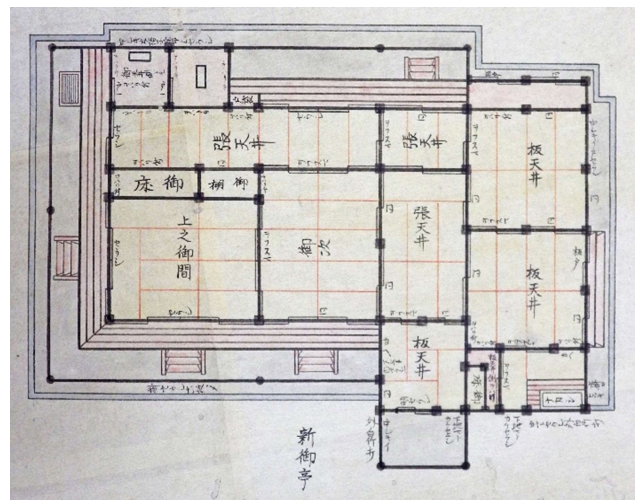


「高山御亭図」(16.89-17)



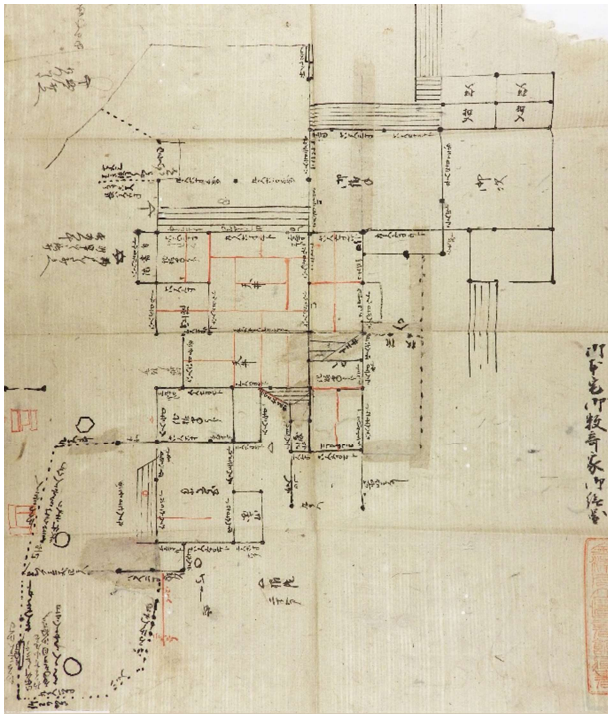
「高山之御亭絵図」(16.18-244③)

栄螺山付近にあった高山御亭の図面です。

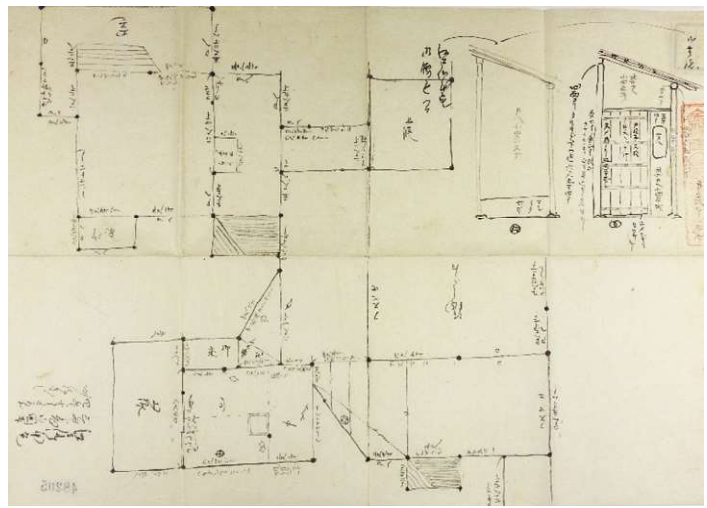


「御露地新御亭并御泉水御馬場等」(部分)

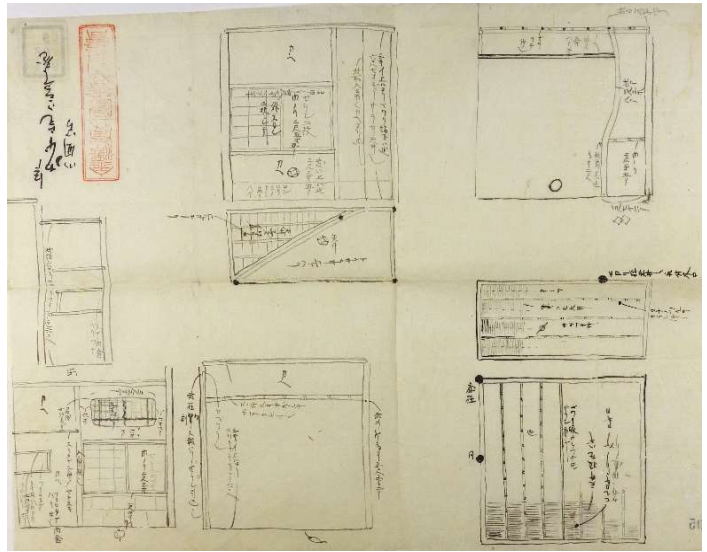
(「江戸屋敷総図」、16.18-131⑪)



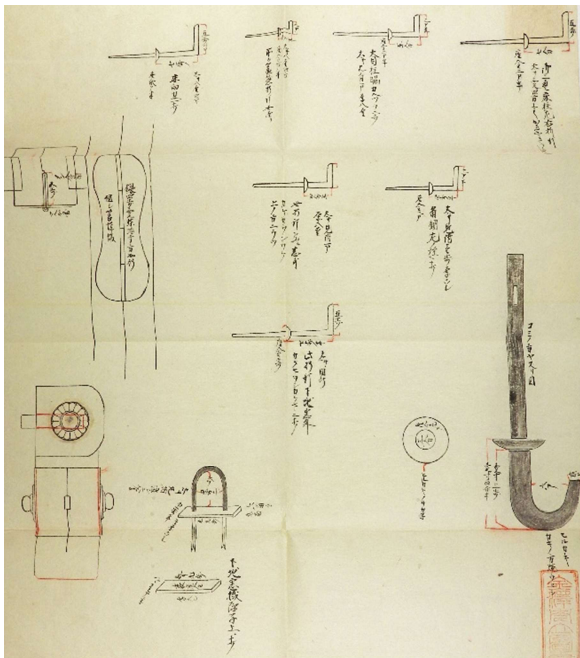
平面図



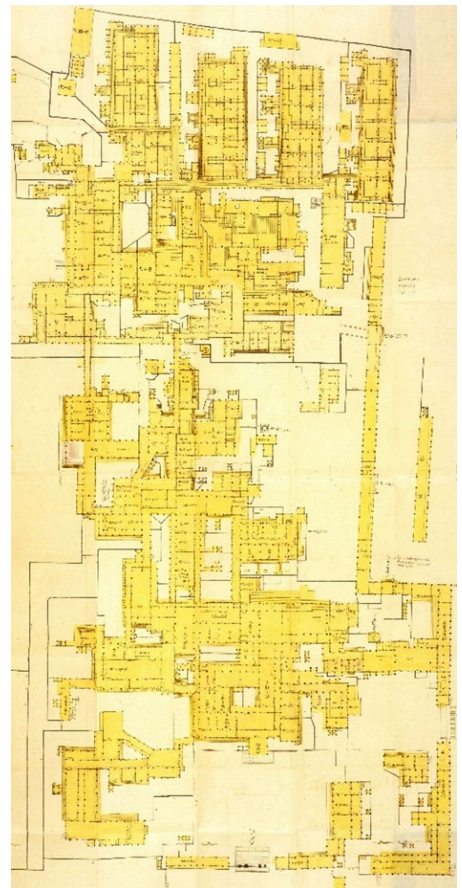
立面等



建具等

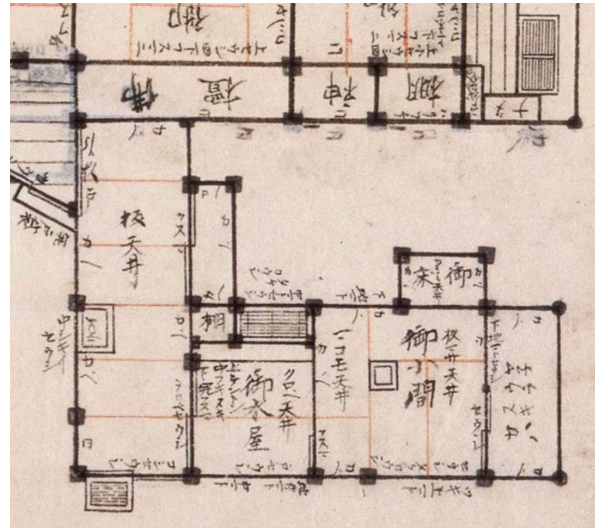
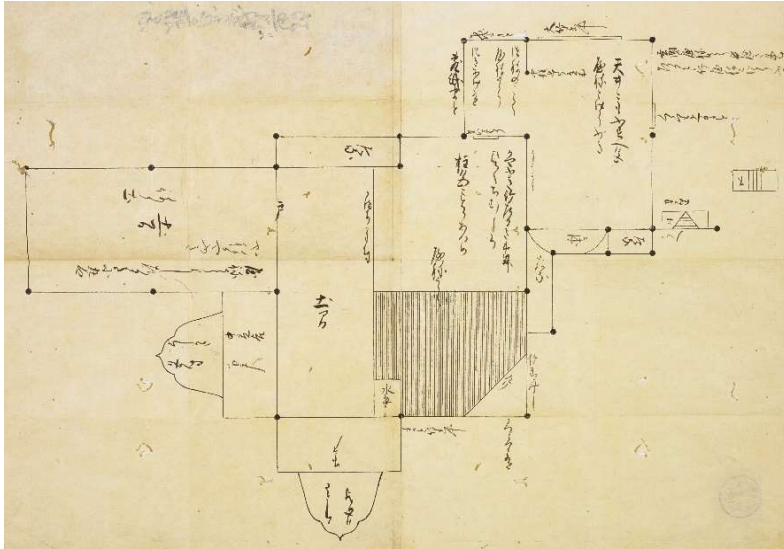


金具絵図



(参考)数寄屋の位置
「御殿向窓御絵図」(16.18-138)

「江戸御本宅数奇屋絵図」(「金谷御小間御普請之節入用之絵図」、18.6-63)
文化元年(1804)、金谷御殿に茶室を造営する際参考にするため取り寄せられた江戸藩邸の茶室の図面です。図面には、露地に接した箇所三箇所に三畳の茶室が描かれています。この茶室は、文政期頃の絵図では本宅の北東角に確認できますが、天保期には当該位置に東御居宅が存在することから、その間に撤去されたものと考えられます。



「駒込御数寄屋之指図」(16.18-187)

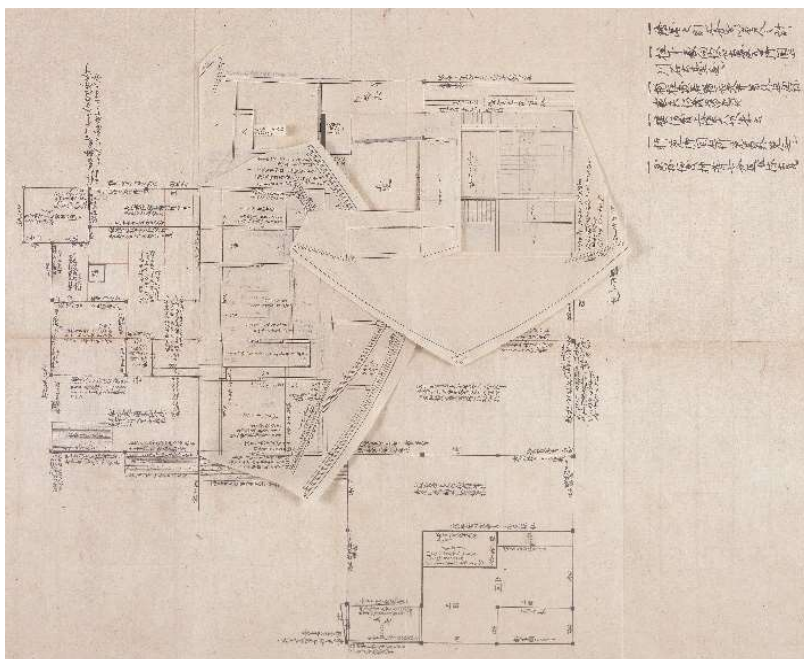
駒込邸にあった数寄屋の図面です。駒込邸は明暦大火後に上地した牛込邸の替地として与えられ、加賀藩の中屋敷となりました。

「江戸御中屋敷絵図」(部分)(090-402)

天保3年の中屋敷の御殿の図面です。この頃、12代齊広正室の真龍院が居住していました。「御小間」という四畳半の部屋があり、炉や床、水屋があることから、茶室の存在を確認できます。

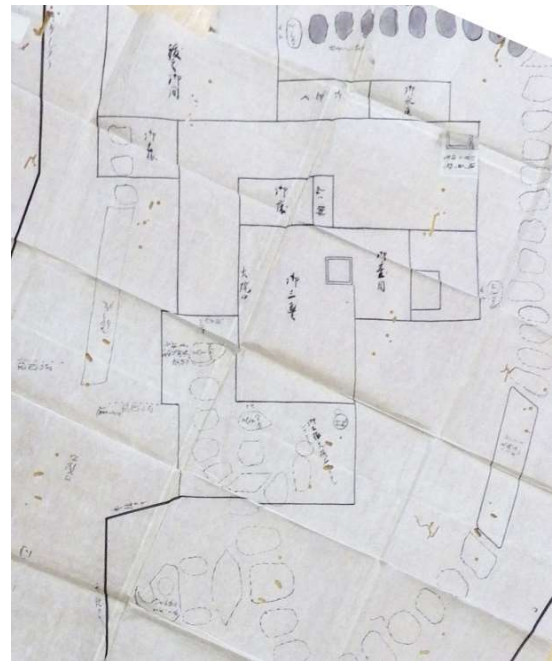
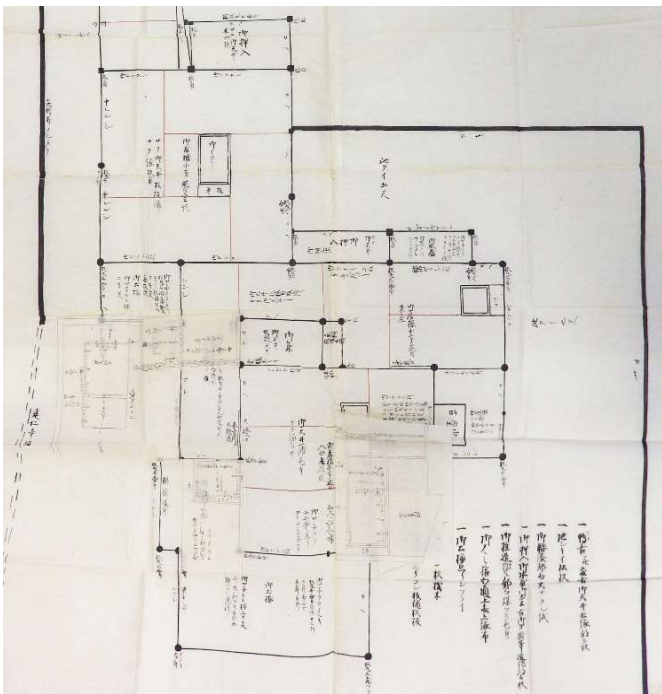
<金谷出丸の茶室>

現在尾山神社がある場所は、藩政期は金谷出丸と呼ばれる城の一部でした。御殿の創設以前の金谷出丸には、庭園や馬場が設けられたほか、庭に御亭が存在したことが確認されます。その後、金谷出丸には御殿が建設され、多くの場合藩主の隠居など居住者が代わるのを契機に、数度にわたり改築がなされました。当初出丸にあった御亭は御殿の建設時に撤去されましたが、治脩の隠居御殿として使われた時期や、齊広正室の真龍院が居住を始めた頃にも御殿に茶室が設けられたことが確認されます。



「金谷御屋舗御亭平起絵図」(16.18-61)

起絵図(おこしえず)とは、平面図の上に壁面等を描いた別の紙を貼り付けたものです。普段は紙片を折り畳んでおき、見たいときに紙片を立て起こして立体的に見られるようにした図面です。茶室の図面ではしばしば見られます。金谷出丸には、延宝9年(1681)に書院・御亭が設けられましたが、御殿建築時に撤去されています。

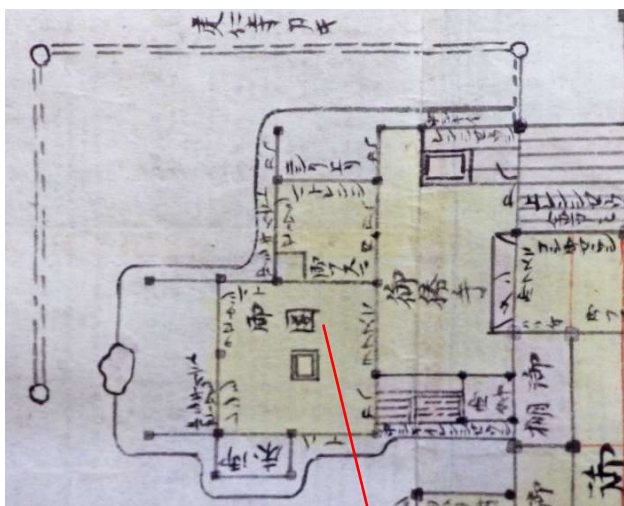


「金谷御殿御小間御絵図」(部分)(16.18-218)
用材が詳しく記されている図面です。

「金谷御殿茶室并御庭図写」(部分)(16.18-219①)
露地の様子がわかる図面です。

治脩が隠居御殿として使用していた頃の茶室の図面と考えられます。三畳台目(茶室の畳で通常の4分の3の大きさのもの)の茶室と、飛石など露地の様子がわかります。この茶室は御殿から廊下でつながり、庭に向けて突き出す形で建てられていました。

(参考)茶室の位置
「金谷御殿并御広式惣御絵図」(16.18-58)



「御囲」

「松之御殿図」(部分)(16.18-59)
真龍院が居住していた頃の御殿の図面です。寢所近くに「御囲」(茶室)があることが確認できます。

<兼六園の茶室>

現在の兼六園の敷地の庭園としての始まりは、綱紀の時代に百間堀沿いの傾斜地に蓮池御庭が造られたことに始まります。宝暦大火後、治脩の時代には再整備がなされました。敷地の高台側には藩士の屋敷、次いで学校が置かれるなど変遷がありましたが、19世紀前半には斉広の隠居御殿として竹沢御殿が作られ、庭園として竹沢御庭が造られました。斉広の没後、竹沢御殿は順次解体・縮小され、庭園として再整備されていき、幕末頃には蓮池御庭と竹沢御殿が一体化されました。



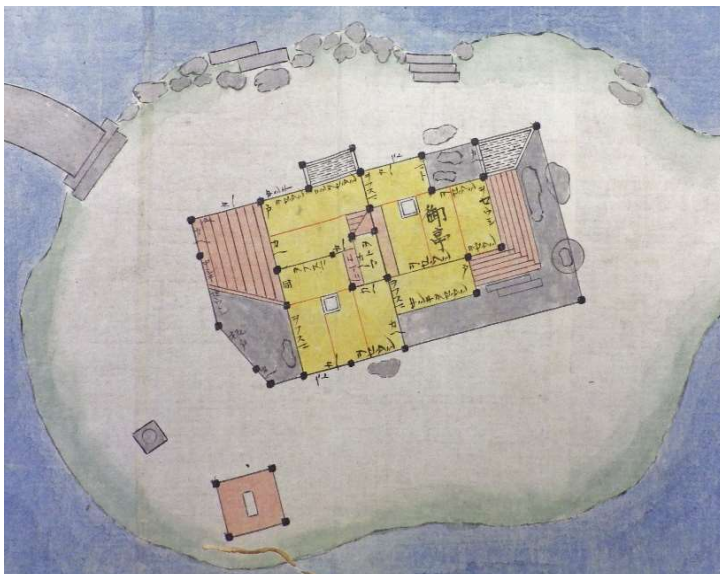
「蓮池高御亭辺」(部分)

(「竹沢御殿・御庭絵図」、16.18-222④)

高之御亭は、綱紀が造営した蓮池御亭の系譜を引く建物です。高之御亭には一畳半の茶室があったと言われています。

「蓮池御腰懸地指図」(18.6-51)

腰掛とは露地に設けられた休息所のことを指します。茶事においては、亭主の迎えを待つ間や中立の際に使われました。



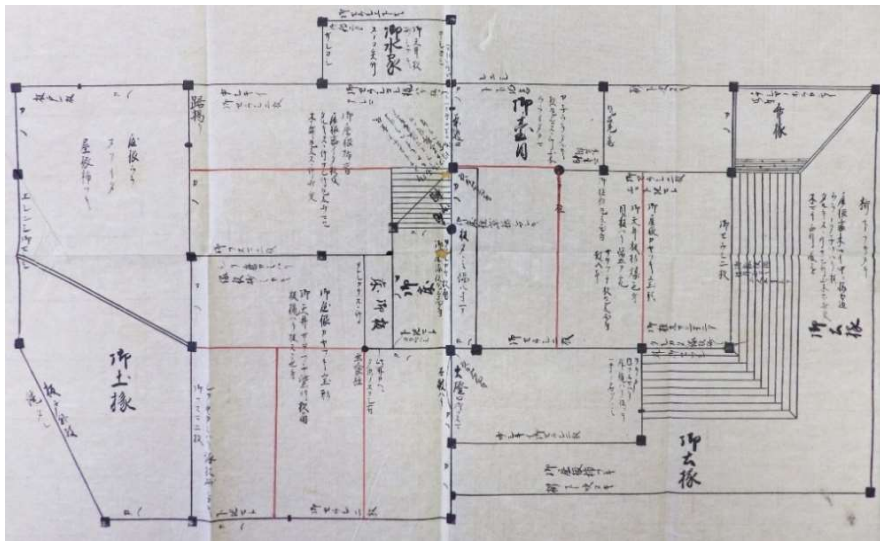
「蓮池滝見御亭辺」(部分)

(「竹沢御殿・御庭絵図」、16.18-222⑦)

治脩は安永3年(1774)に瀧見御亭を建設しました。建設当初中島御亭と呼ばれたこの茶室で治脩は三度茶事を楽しんだことが知られています。この御亭は現在夕顔亭として知られています。

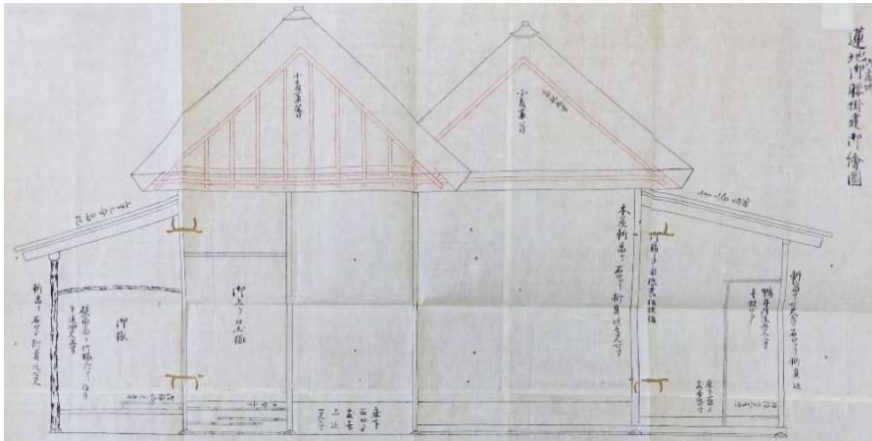
「蓮池庭図」(部分)(090-1025-2-10)

瀧見御亭の外観が描かれています。



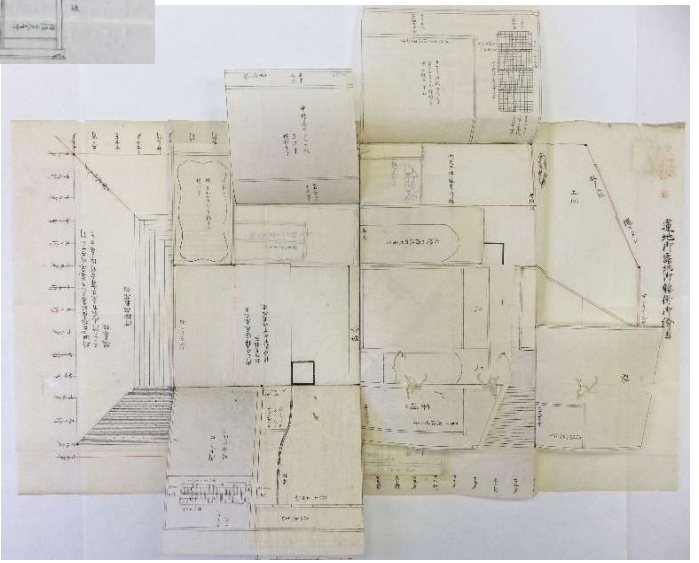
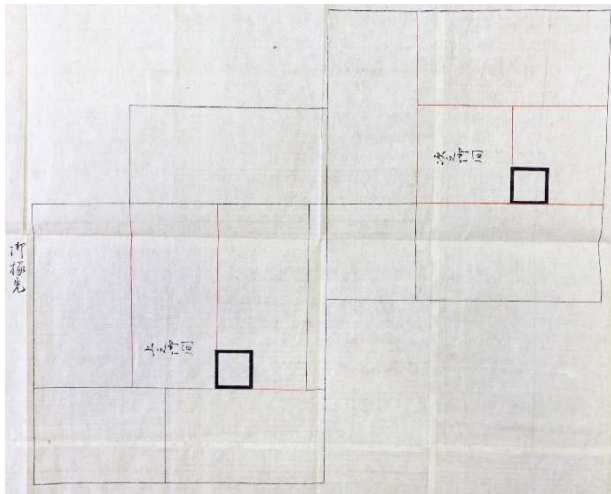
「蓮池瀧見亭之図」(16.18-226)
 瀧見御亭の諸図面です。三畳台目の茶室があることが確認できます。
 間取りも当時の形を現在もとどめていることがわかります。

①茶家地指図



③起絵図

②側面図・平面図



【利常と茶人】

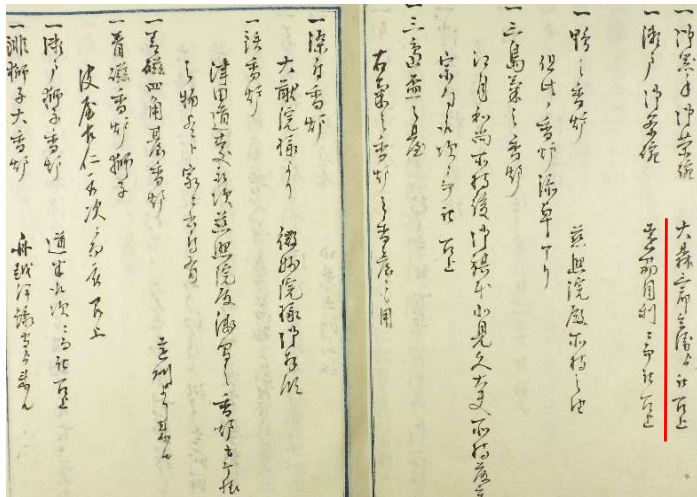
歴代藩主の中で茶の湯がとりわけ盛んだったのが利常の時代です。利常は茶の湯に大きな関心を寄せ、茶器を収集し茶室を整備するなどとともに、この時代を代表するような茶人たちと交流し、茶会を行いました。これらの茶人の影響は、金沢の茶道に後々にまで及びました。

<小堀遠州>

諱は正一、遠江守を通称としたことから、一般に遠州と呼ばれています。近世前期を代表する茶人のひとりです。古田織部に師事し、将軍秀忠・家光の茶道指南役を務めたと言われています。「綺麗さび」と呼ばれた遠州の茶は、大名風に作り上げられ「大名茶」といわれています。また、各建築の作事奉行や伏見奉行などを務めるなど、幕僚としても活躍しました。利常と光高は茶の湯に関して遠州から教えを受け、遠州の茶会にも参加していました。また、藩士の中にも遠州の茶会に参加したものが複数いました。遠州の孫である新十郎(2000石)や甥の重政(1000石)が前田家に召し抱えられており、遠州と前田家に深い関わりがあったことが窺えます。

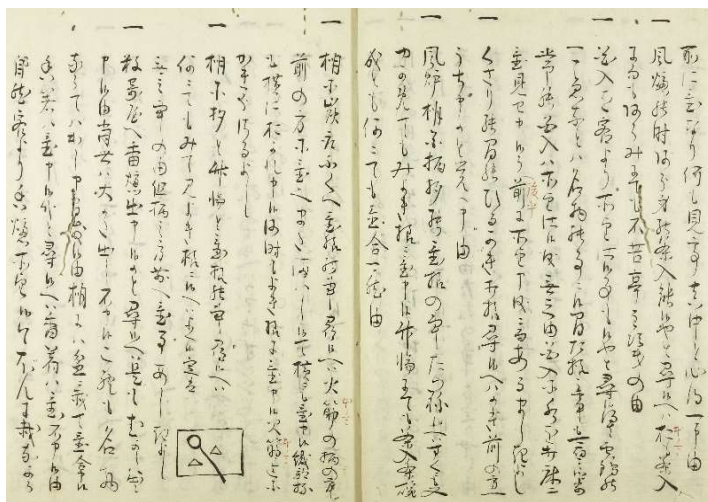
「表納戸道具由来」(16.95-2)

嘉永2年(1849)に加須屋十左衛門所有の留帳の写しをさらに前田家編輯方が筆写したもので、表納戸の道具の伝来が書き上げられています。利常は茶の湯そのもののみならず、茶道具の入手・鑑定や庭園の設計等まで指導を受けていました。文中の「瀬戸御茶碗」は遠州の目利きで入手したとあります。この他にも、遠州の所持品であったものが多く確認できます。



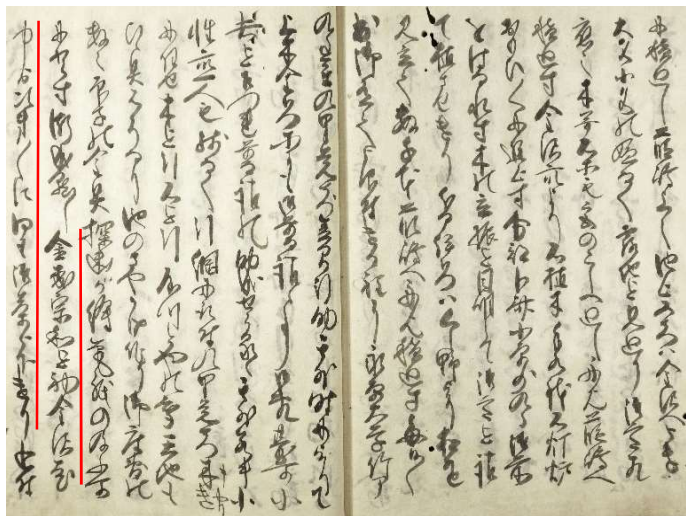
「光高公小遠州江御尋之日記」(094.7-2)

光高が遠州に茶の湯に関して尋ねた内容をまとめた覚書です。利常と光高は遠州と茶の湯に関して書状のやりとりをしていたことが知られています。光高の質問は茶道論など深い内容に及んでいたと言われています。遠州と光高の茶の湯に関する問答をまとめた史料は、いくつか確認できますが、本史料は光高の弟で大聖寺藩初代である利治を経て加賀藩で茶堂を勤めた市井家に伝わった日記の写しになります。



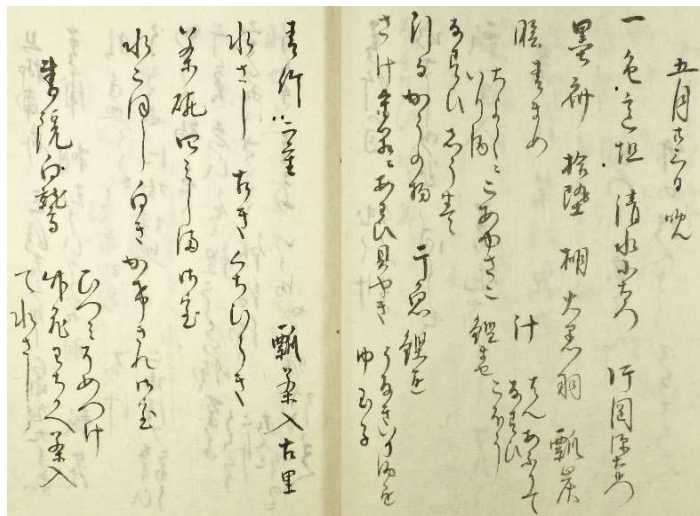
<金森宗和>

金森宗和は宗和流の茶の湯を起こした人物として知られています。「姫宗和」と言われた繊細で優美な宗和の茶は、とりわけ公家に愛好されました。宗和は客分として利常に仕え、子である方氏は前田家に召し抱えられました。宗和流は方氏以降金沢の金森家歴代が継承しましたが、宗和から七代目にあたる知直が自害した後は多賀宗乗(直昌)が継承し、宗乗没後はその高弟であった九里氏に継承され幕末に至りました。



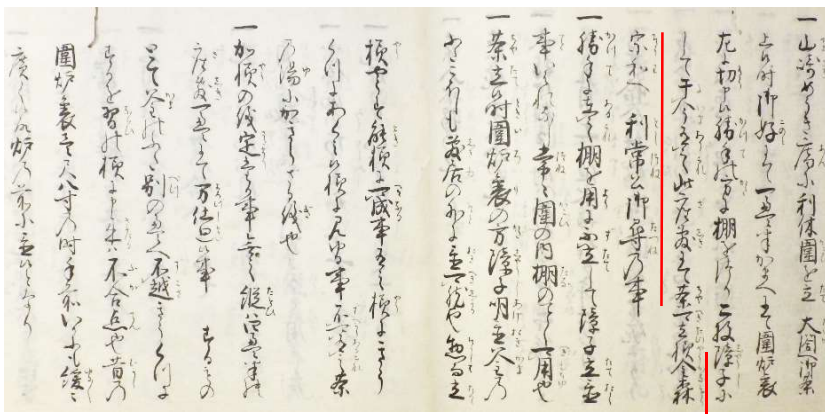
「三壺問書」(16.28-13⑭)

利常は隠居領である小松城の葎島に数寄屋を作りました。この数寄屋の完成時に利常は、重臣たちに加えて宗和も招いて茶事を行っています。



「宗和会席」(791.01-69)

宗和最晩年の茶会記の写しです。明暦2年(1656)4月~10月の35会が記されています。

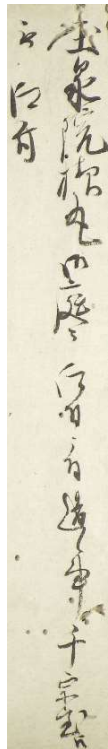
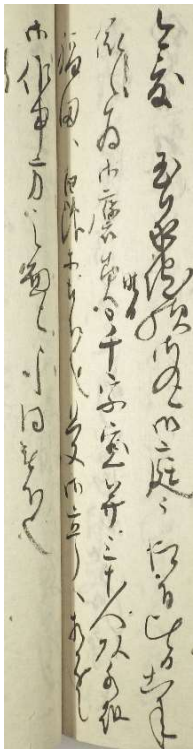


「茶道の書」(096.7-7⑤)

宗和の子で前田家に仕えた方氏の弟子が書き留めた十三冊本の写しです。『茶湯古典叢書4 金森宗和茶書』(思文閣出版、1997年)で「十三冊本宗和流茶湯伝書」として翻刻されています。

<仙叟宗室>

仙叟宗室は千宗旦の四男で、千利休の曾孫にあたります。裏千家の祖として知られています。最初は利常に出仕し、利常の隠居領である小松に居を構えました。利常の没後は、小松から金沢に移り、味噌蔵町に居を構え、京都と往復していたと言われています。茶道のみならず、大樋長左衛門を招き作陶にあたらせ、釜師宮崎寒雉に制作指導を行うなど、関連する分野にも影響を与えました。晩年に前田家を致仕し、後進育成のため京都に戻りました。

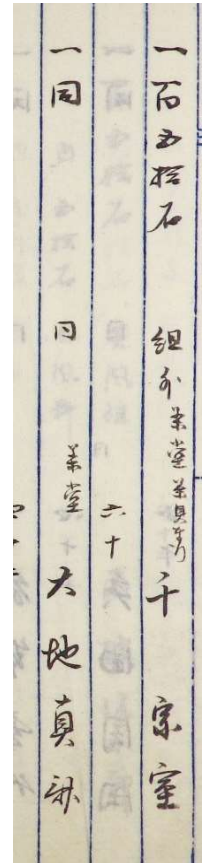


「葛巻昌興日記」(16.40-75②)

仙叟は作事においても技術を発揮しました。元禄元年には、綱紀の命により、玉泉院丸の亭・石橋・花壇等の普請を行うなど庭園の再整備を担当しました。

「寛文十一年土帳」(16.30-40)

150石取で茶堂茶具奉行を勤めていたとあります。



「茶道直指抄(写)」(091.0-41)

仙叟の高弟で「臘月庵日記」の著者として知られる町人浅野屋次郎兵衛が著したもので、茶の湯に関する仙叟の教えや、遠州と光高の問答など、茶の湯に関連する諸書を手写したものなどが記されています。なお、「茶道直指抄」は本史料を底本にして『茶の湯文化学』36号(茶の湯文化学会、2021年)で翻刻されています。

